

野の花 ものがたり

徳永進『野の花通信』より

「作」ふたくちつよし
「演出」中島裕一郎



聖なる牛を撃つ 高草木光一

岡村昭彦（一九二九—一九八五）という名前をいまでは知らない人のほうが多いかもしれない。一九六〇年代から七〇年代にかけて、アメリカの週刊グラフィック誌「ライフ」を中心に、ベトナム戦争報道写真の世界に送りつづけた著名なフォトジャーナリストである。五六歳の若さで亡くなった岡村は、その晩年に当たる一九八〇年代にバリエーションをアメリカから日本に導入し、またヨーロッパからホスピスを紹介した先駆者でもある。ベトナムの戦場で無残な死体を撮りつづけてきた岡村は、それとは対極にある安らかな死のあり方をホスピスというかたちで模索した。

岡村が求めたホスピスは、決して単なる「末期がん患者のケア施設」ではなかった。ヨーロッパ諸国、アメリカ、オーストラリアと世界を駆けめぐり、ホスピスの歴史と実態について思索を連ねた遺作『ホスピスへの遠い道』（筑摩書房、一九八七年）は、むしろそのようなホスピス理解を覆すために書かれたと言ってもよいだろう。民族対立、宗教対立、貧富の格差等の世界史の矛盾が集積するアイルランドの地にすでに居を構えていた岡村は、ホスピスの源流が一九世紀アイルランドにあったことを突きとめる。カトリックの修道女メアリ・エイケンヘッドによって差別される弱者の発想でつくられたホスピスは、死にゆく者の誰をも差別しない、平等原則を貫き通す場であった。岡村は、この源流にあった「連帯」の精神をホスピ

スの「魂」として捉えた。東京医学専門学校（現在の東京医科大学）中退という特異な経歴をもち、若き日に千葉県の被差別部落に住み込んでそこから歴史を展望しようとした岡村が、最後に撮った「未来」、それがホスピスだった。

岡村が既存の医療やホスピスの批判のうえに志向したのは、死にゆく者と生きのこる者との対等な立場で対話する文化的な場としてのホスピスだったと私は捉えている。それは、コミュニケーション機能とホスピス機能の融合という一種の社会変革をも射程に入れた構想だったと言えるだろう。その詳細は、拙著『岡村昭彦と死の思想——「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス』（岩波書店、二〇一六年）にまとめてある。

岡村が亡くなってからすでに三〇年以上が経ったが、岡村の多岐にわたる遺産はさまざまな人々によって受け継がれている。ホスピスについて言えば、岡村の壮大な構想を引き継いだ一人は、間違いなく徳永進だろう。

徳永の最近の著書『どちらであつても——臨床は反対言葉の群生地』（岩波書店、二〇一六年）は、鳥取に開設した「野の花診療所」での日々の出来事をもとに書かれたものだが、生半可なバリエーションの議論など一息で吹き飛ばしてしまうほどのエネルギーに満ちている。たとえば、「母の意志で、家で、延命なしで、やすら

に最期を迎えさせてあげたい」と言っていた娘さんが、いざ母親の容態が悪くなると、救急車で診療所に運んできて、「最善を尽くして下さい」と告げる。徳永医師は人工呼吸を施すことになり、「家で、延命なしで」という前言は見事にひっくり返ってしまう。そのように、死を前にしておろしながら、二転三転するドタバタ劇を、徳永は温かいまなざしで見つづけている。人々の矛盾や葛藤をそのまま受け入れる度量がこの人にはある。いやそれ以上に、人々が繰り広げる悲喜劇を、自分自身の内面劇であるかのように楽しんでいる風情さえ浮かんでくる。ここには、大仰な「社会変革」の理想などなくとも、岡村の言う「連帯」の確かな息吹があると私は感じる。尊厳死法案をめぐる自己決定権としての「リビング・ウィル」を小賢しく唱えている人々は、徳永の実践を前にして何を語りうるのだろうか。



岡村昭彦『ブラブカ貯水池のほとりて犬と遊ぶ少年』（ウェックロー州、アイルランド共和国 1977年）

岡村が監訳者として日本にホスピスを紹介した、シシリー・ソンドラスほか編『ホスピスケアハンドブック——この運動の反省と未来』（家の光協会、一九八四年）のなかに、近代ホスピスの祖と言われるソンドラスの「聖なる牛を撃つ」という言葉がある。自分たちが育てあげてきた理念や方針を後生大事にするのではなく、それを破壊するところからはじめて新しい明日が生まれる。言い換えれば、ホスピスという過酷な現場は、残酷なまでの自己批判のうえにしか成り立たない。岡村は、ホスピスの導入期にあつた日本に、自己批判という成熟期の視点をいきなり持ち込もうとしていたのである。時代に先行する岡村の発想が評価されるのは、実は今後のことであるかもしれない。

この度、徳永と「野の花診療所」をモデルにして、劇団民藝が『野の花ものがたり』を上演するという。徳永の類まれなユーモアとその奥に秘められた強靱な想像力をどのように表現するのか。徳永が「聖なる牛を撃つ」瞬間をどう演じるのか。この一筋縄ではいかない課題を自ら引き受けた劇団民藝の心意気に、まずは拍手を送りたい。

高草木光一 たかくさぎ・こういち

一九五六年、群馬県生まれ。慶応義塾大学経済学部教授。専攻は社会思想史。著書に『岡村昭彦と死の思想』、編著に『いのち』から現代世界を考える『一九六〇年代 未来へつづく思想』『思想としての「医学概論」——いま「いのち」とどう向き合うか』『へ平連と市民運動の現在』、共編著に『一八四八年革命の射程』『東アジア 日本が問われていること』『生きる術としての哲学——小田実最後の講義』などがある。